

## 二人のノーベル経済学者と国際貿易

神戸大学経済経営研究所

准教授 大久保 敏弘

先日、今年のノーベル賞受賞者が発表され、国際経済学者のポール＝クルーグマン教授が受賞した。クルーグマン教授は80年代から90年代にかけ、規模の経済を取り入れた新しい貿易理論の構築や新経済地理学(空間経済学)の先駆け、国際金融・通貨危機の分析で活躍し、多大な貢献が評価されての受賞である。久々の国際経済学者の受賞である。

私事ながら、私の研究領域は国際貿易論、空間経済学であり、クルーグマン教授は師匠の師匠にあたる。学問上の「祖父」にあたる。昨年、私の前任のマンチェスター大学にて初めてお会いし、夕食をともにした。彼の話は最近の研究の流れというよりは、アメリカの大統領選と政治、イラク情勢、最近の経済情勢、国際関係と多彩だった。さすがに関心や知識の幅が広がった。

私は中学・高校の時から日本の政策や政治に興味があり、経済学部に入学した。大学入学当初から経済政策を専攻しようとしていたが、高度な数学ばかりの経済学というよりは、経済史、経済思想(ケインズなど)や政策系の本を読んでいた。ちょうど目に留まった、クルーグマン教授の「脱国境の経済学」を読み、感銘を受けて国際経済学を専攻した。専門的な知識を身につけ、国際経済学で世界のフロンティアに立ち、日本をリードするとともに、実務家として日本の外交・通商産業政策の分析や立案、コンサルティングを幅広くできるのが大学学部入学以来の夢だったし、今でも変わらない。学部時代のゼミの志望動機、進路志望もそのように書き、ゼミ志望の際の書評はクルーグマン著の「脱国境の経済学」だった。その後の学位論文は全て国際貿易、経済地理や空間経済学に関するテーマであり、クルーグマンなくして論文は成り立たないほどであった。

その後、学部時代の恩師をはじめ多くの人の支えもあって、国際貿易、空間経済を欧米で学ぶことができ、日本にないタイプの国際貿易論、空間経済学、経済政策論のフロンティアを学ぶことができ、日本が忘れがちな欧州の政策論や国際関係・外交政治論も学べ、国連職員や欧州連合、イングランドやマンチェスター地域の政策担当者をはじめ交流や交友が広がった。さらに念願のクルーグマンの系譜をひくことができ、いろいろ学ぶことができた。

私が出会ったもう一人のノーベル経済学賞はスティグリッツ教授である。彼の書いた入門

用の経済学の教科書は有名で世界中で使われている。マンチェスター大学の名誉教授でもあり、毎年一回、マンチェスターを訪れる。昨年、英国政府の PhD 持ちの官僚たちを前にした会合で彼の前座を私がやり、2 日間ともにした。ホテルの大広間で行われた彼の発表は国際経済(貿易)の研究の流れを紹介しつつ、貿易、産業、政治、戦争、環境、開発、移民といった現実の国際問題を鮮やかに明快に分析し、発表後は 2 時間以上にわたって質問がたえることがなかった。国際貿易がいかに素晴らしい学問体系で、いかに社会に重要なのかを実感できる講演だった。一冊の本ができるほどのよくできた内容だった。

二人のノーベル賞学者に共通するのは、一つ目に理論的に話すが決して奇をてらわず、誰に対してもわかりやすく、かつ大量の情報をうまく構成しつつ、自分の視点を入れて鮮やかに分析するところにある。二つ目には非常に精力的であるが、決しておごらず人の話をよく聞く点。スティグリッツ教授は特に丁寧に人の質問に答えていたのが印象的だった。最後に、政策志向が強く、現実的である点にある。何が世界にとって重要か、問題かを真剣に考え、どう政策があるべきかを考え、説得の手段として国際貿易の経済学の分析ツールをどう使うのかという順序をとっている印象を受けた。非常に最もな話で当たり前のようだが、最近の経済学者、特に私のような若手研究者には忘れがちになってしまう点でもある。年々分析ツールが高度化したり、データが大規模化したり、コンピュータを使ったシミュレーションをしたり、また、コンピュータやインターネットの普及とともに論文の数も格段に増え、論文間の競争が激化し、モデルの拡張につぐ拡張、分析ツールの競争、研究費の競争となってきたのではないかという印象がある。また、分野は細分化し、他の領域の研究者にわかりやすく端的に話すといったことが難しくなっているように思われる。さらに若手の経済学者の就職・職場環境は厳しく、研究実績(論文数)を重視する傾向にあり、とくに日本では実績の熾烈な競争となっており、分析ツールの競争の波に飲み込まれがちである。私のような PhD 取得後 3 年目の若手には見失いないがちな視点 現実経済からの乖離 を彼らは示してくれている。

私は彼ら二人の大家を目標にするなど、恐れ多く不可能な話である。能力的には、今までお世話になった恩師たちにも遠く及ばない。しかし、2 人の経済学者に会って学んだスタンスを大事にし、業績や能力を競う学者というよりはむしろ、何が重要か、何が現実かをよく考え、政策分析(とくに日本の通商産業政策、地域政策、環境政策)を基本に忠実に幅広くやっていきたい。研究のための研究ではなく、業績のための研究ではなく、一隅を照らすような意味のある、自分にしかできない研究をしたい。例えば、直近の問題としては、産業空洞化、地球温暖化・環境問題、グローバル化がもたらす所得や地域格差の拡大、地域振興など日本の直面している重要な政策課題について、国際貿易、空間経済学の理論と実証を駆使して、果敢に研究をし、現実の社会への政策提言をできればと思う。これに伴い研究体制をいち早く作り、強化していきたいし、今後は欧米での経験や知見、人

脈を研究や教育、社会に生かせる機会も見つけていきたいと思う。

最後に、神戸大学経済経営研究所、及びリエゾンセンターの関係者の方々、輝かしい伝統を誇る神戸大学の国際貿易を支えてこられた多くの方々には今後ともご指導とあたたかいご支援とご理解のほどよろしく申し上げます。